

# 京都府福知山市下山古墳群第17, 42号墳測量調査報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学古代学研究所 公開日: 2015-12-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 憲一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/17691">http://hdl.handle.net/10291/17691</a>

# 京都府福知山市下山古墳群第 17, 42 号墳測量調査報告

佐々木 憲一

## 1. 調査の背景と目的

本稿は、京都府北部、旧丹波国北部の福知山市に所在する下山古墳群第 42 号墳および第 17 号墳(図 1, 2)の測量調査報告である。この調査は、吉村武彦文学部日本古代史教授を研究代表者とする文部科学省・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本列島の文明化を究明する古代学の総合化研究」のサブプロジェクト1「日本列島の中央と周縁」の一環として実施した。この研究期間の前半、すなわち 2011 年度までは、周縁地域の国家形成過程に迫るため常陸南部の大型前方後円墳の測量調査(佐々木ほか 2012 など)や大型円墳の小美玉市塚山古墳の試掘調査(佐々木ほか 2014)を実施してきた。後半になり、中央における国家形成過程理解のため、旧丹波国北部をフィールドとして選択した。中央といっても、大和、山城、摂津、河内地域は調査研究も蓄積されており、調査研究の余地がある中央の周縁地域を選んだ。

下山古墳群を研究対象とするのは、隣接して在地豪族が建立したと推測される和久寺廃寺が立地しており、古代豪族の権力のシンボルが古墳から寺院へと変化した現象を跡付ける重要なフィールドであるからだ。もちろん、大型前方後円墳付近には往々にして古代寺院が建立されることはよく知られており(例えば駒井 1995)、常陸南部も東国第2位の規模を誇る石岡市舟塚山古墳付近に茨城廃寺が存在する。しかしながら、下山古墳群は前方後円墳を伴わない後期古墳群であるが、逆に、それでも8世紀になって古代寺院を生み出したことに意味があると考えられる。

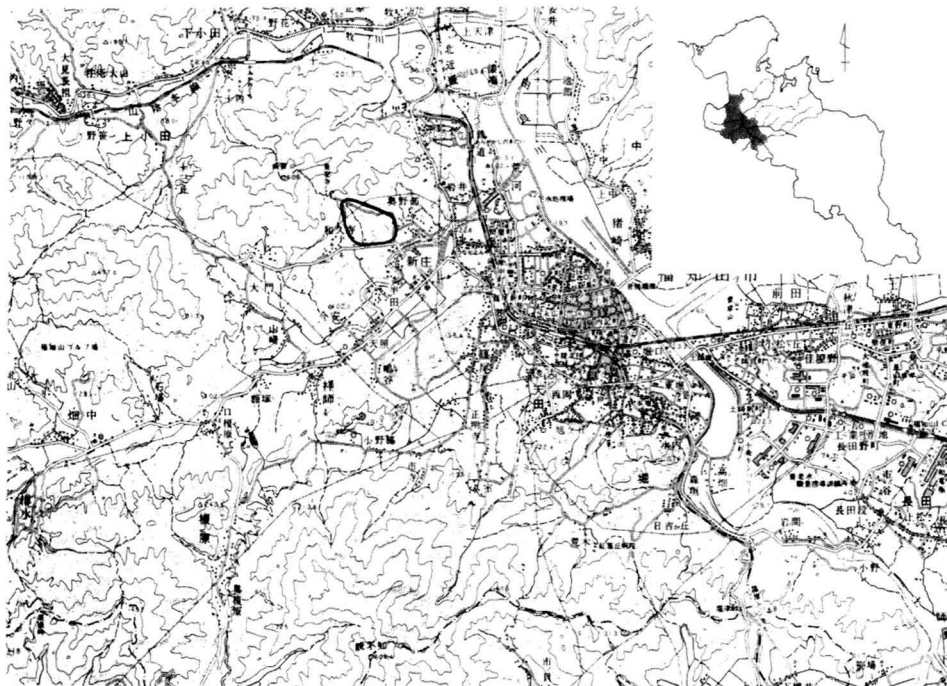


図 1 京都府福知山市と下山古墳群の位置 (崎山 1993、第 1 図)

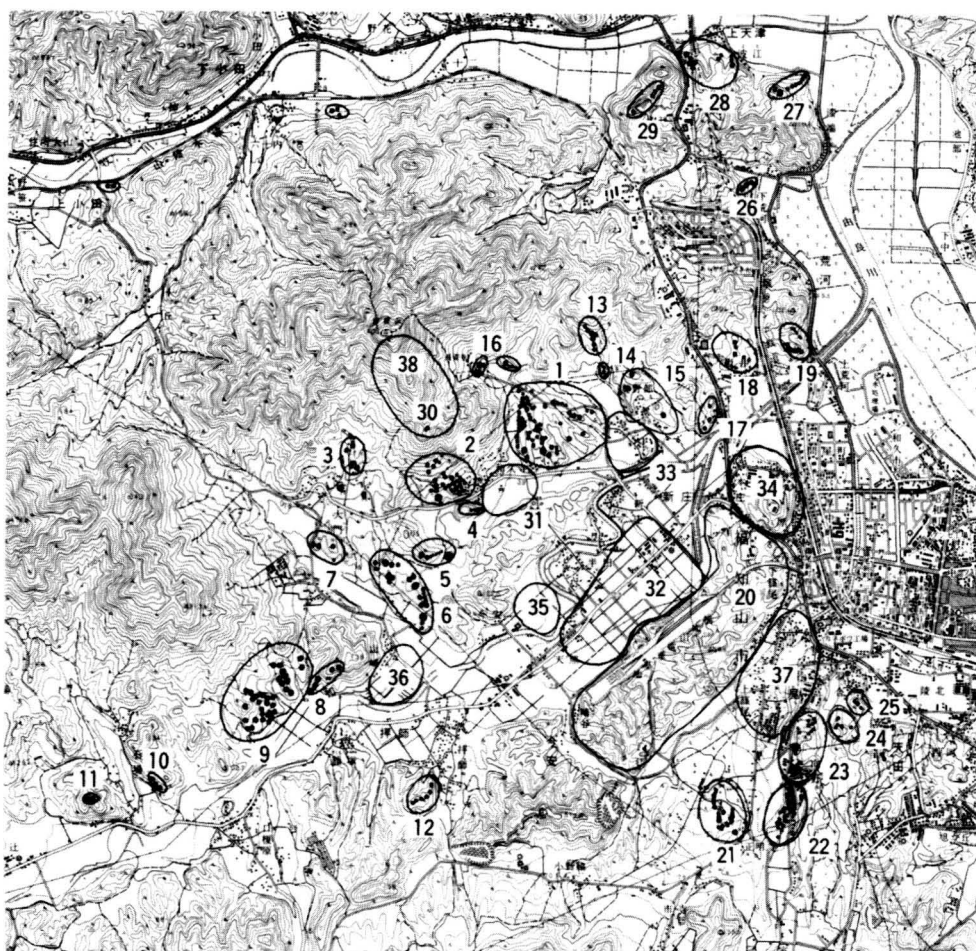


図2 下山古墳群(1)、和久寺廃寺(31)とその周辺の遺跡(例えば、横穴式石室がよく残存する額塚古墳群は9) (崎山 1994、第2図)

和久寺廃寺は1980年代前半、圃場整備事業に先立ち発掘調査が実施された(大槻ほか1983, 1984, 1985)が、大半の調査成果が未報告のままである。それに先立つ1970年代後半、当時中学・高校生であった筆者が和久寺廃寺の瓦を多数表採し、平瓦には桶巻作りによるものと一枚作りによるものの両方が出土すること、軒丸瓦には山田寺系単弁蓮華文と複弁蓮華文とが両方出土するが、後者は平城宮の影響を受けたものであることを明らかにし、その研究成果を1982年に自費出版した(佐々木1982)。『福知山市史』第1巻(1976)では、法隆寺出土瓦を引き合いに出して、また山田寺系の軒丸瓦が表採されることを強調し(山田寺系であることは確かである)、和久寺廃寺の年代を白鳳時代(7世紀)と古く見積もっているが、実際は和久寺廃寺の建立が8世紀まで続いていたことを筆者が明らかにしたのである。しかしながら、1980年代前半の報告書には筆者の研究成果が反映されることはなかったのは極めて残念である。

## 2. 下山古墳群の概要と既往の調査

下山古墳群は100基以上の横穴式石室を主体部とする円墳と1基の方墳(1号墳)から構成される群集墳である。43号墳を除き、横穴式石室の石材は地元の人々が抜き取ったため、現在、馬蹄形に墳丘が残るのみである。

1988年から1994年にかけて、農道の建設工事に先立ち、20基以上の円墳が発掘調査され、古墳の築造が6世紀から7世紀まで継続することがわかってきた(崎山1989, 1993, 1994)。発掘調査に併行して精密な分布調査も行われ、調査終了時点で103基の古墳が確認された。また古墳群の様相も明らかになってきた。調

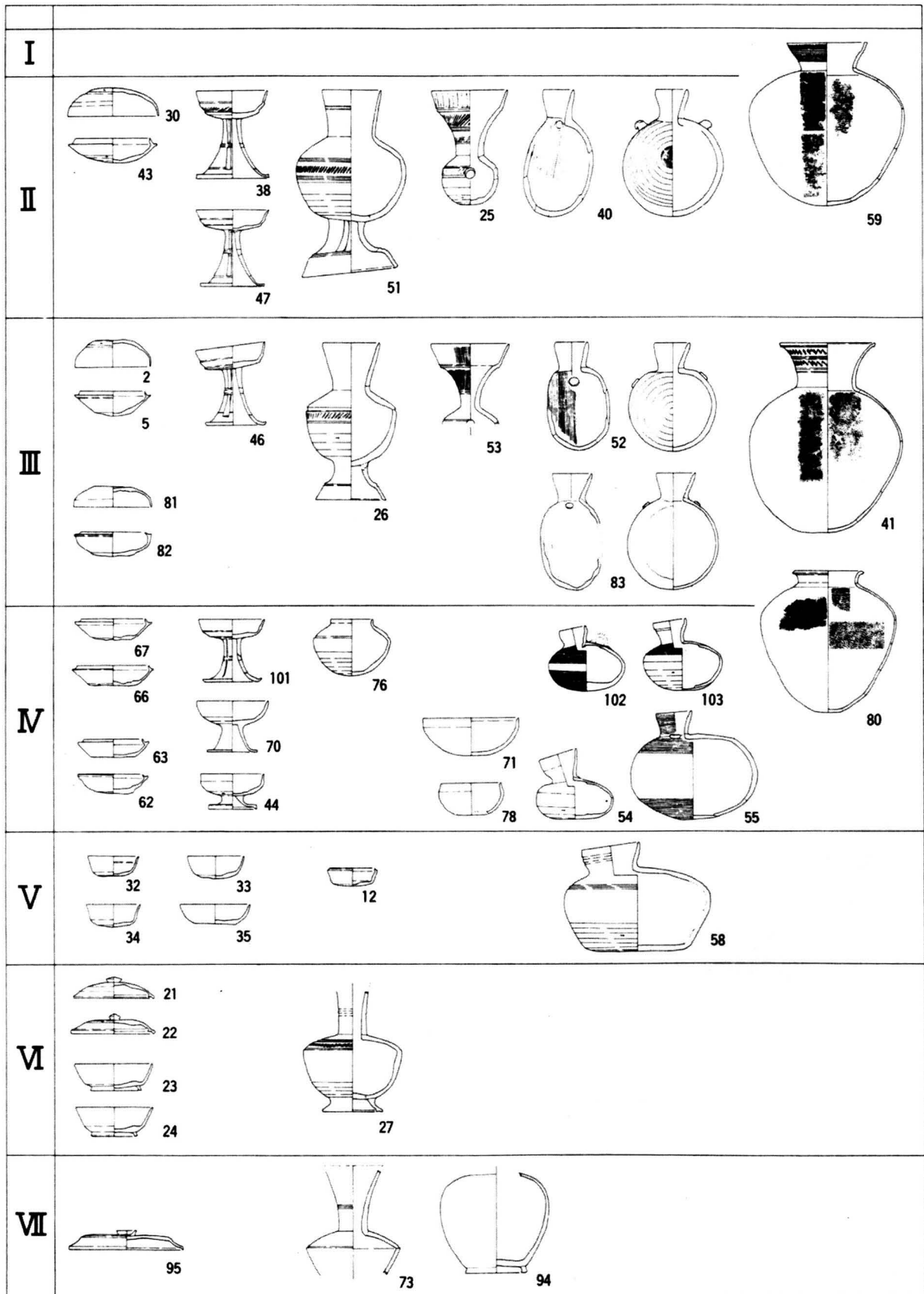


图 3 下山古墳群出土須恵器編年案 (崎山 1994、第 35 図)

査を担当した崎山は、古墳群中の古墳を規模に基づき次の 4 類に区分している。大規模:直径 20m 前後、中規模 A:直径 15m 前後、中規模 B:直径 10m 前後、小規模:直径 10m 以下。この中で小規模墳が 1994 年時点で 78 基を数える。これらは高さが 1m 以下の低墳丘で、今後、数が増える可能性もある。

一連の発掘調査で出土した須恵器は、追葬時のものも含めると TK209 から平城 V にかけて(6 世紀末から 8 世紀にかけて)のもので、TK209 から TK217 を中心とする。土器様相の全体的傾向として、法量の縮小、調整の粗雑化、器種構成・個体数の減少がある。これらの現象にもとづき、崎山は次の通り 7 期に区分した(図 3)。

- I 期:1994 年時点で発掘調査された例はないが、古墳築造状況に基づき II 期以前のものが存在する。
- II 期:器種は、蓋坏、長脚 2 段高坏、脚付長頸壺、短頸壺、はそう、提瓶、甕があり、坏蓋の口径が 12.6cm、蓋坏の天井部には回転ヘラケズリが施される。提瓶の取手は鈎型を呈する。
- III 期:器種は、蓋坏、台付長頸壺、壺、横瓶、提瓶、甕がある。全体的に法量が縮小し、坏身の口径が 11~12cm 前後となる。蓋坏の天井部の回転ヘラケズリは省略されるか、わずかなものになる。提瓶の取手はボタン状となる。
- IV 期:器種は、蓋坏、短脚高坏、提瓶、平瓶、甕がある。法量がさらに縮小し、坏身の口径が 10cm 以下となる。蓋坏の天井部の回転ヘラケズリは省略される。
- V 期:ほとんど坏のみの器種構成となる。
- VI 期・VII 期:下山古墳群では、追葬もしくは古墳の再利用に伴う土器の時期である。VI 期は飛鳥 IV~V に、VII 期は平城 V に概ね相当する。

さらに、この古墳群の構造も明らかになってきた。地形や古墳の位置関係に基づき、崎山(1993, p. 105)は下山古墳群を A~F の 6 つの支群に分ける(図 4)。古墳は、尾根筋に沿って数基ずつがかたまつて築造され、それぞれ横穴式石室の開口方向を揃えている。各支群を構成する古墳の数や内容は均質ではなく、数の上では A 支群が突出する。また発掘調査により、A 支群の 71, 70, 26 号墳をつなぐ墓道が検出された。付近の地形観察から、墓道は支群間の空閑地に各古墳の石室開口部を繋ぐように復元できるという。ちなみに、石室開口方向、墓道の共有関係・位置関係に基づき、崎山は A 支群を 9 小支群に分けている。一小支群は 3~4 基から構成される。古墳時代後期の群集墳の一古墳が家族墓的性格を有するのであれば、それぞれの小支群は 1 家族の 3~4 世代にわたる造墓活動の結果と推定可能である。

最後に、下山古墳群の付近には、横穴式石室導入以前の有力な古墳は存在しない。突如としてこの大古墳群が成立したかのような印象を受ける。「なんらか政治的な規制によって墓域の設定がなされたもの」と崎山(1993, pp. 104-5)は推定する。今後検証すべき重要な課題である。

### 3. 調査の経緯

下山古墳群第 42 号墳(図 4 の 42)と第 17 号墳(図 4 の 17)を調査対象として選んだのは、両古墳とも崎山の分類する「大規模墳」であり、特に 42 号墳は直径 25m 以上の古墳群中最大の円墳であるからだ。42 号墳は B 支群に属し、平野部に近い丘陵突端に立地する。17 号墳も直径は 25m 近くあり、42 号墳に次ぐ規模を誇る。支群を構成する古墳の数では最大の A 支群に属し、すぐ南隣にほぼ同規模の 18 号墳が存在する。

測量調査は 2013 年 3 月と 8 月にわけて実施した。下山古墳群第 42 号墳の調査は 3 月 11 日から 17 日、17 号墳の調査は 8 月 27 日から 31 日である。42 号墳の調査参加者は次の通りである。佐々木憲一、岩田 薫(大学院博士前期課程 1 年生)、尾崎裕妃・小野寺洋介・北山大熙(以上、3 年生)、矢原史希(2 年生)、白石杏奈・林和也・箕浦絢(以上、1 年生)(写真 1)。また 17 号墳の調査には以下のメンバーが参加した。佐々木憲一、岩田 薫(大学院博士前期課程 2 年生)、尾崎裕妃・北山大熙(以上、4 年生)、矢原史希(3 年生)、林



和也(2年生)、千田雅文・野本雄太・橋本洋一郎(以上、1年生)(写真2)。両方の現場では岩田薫が中心的な役割を果たした。

明治大学文学部考古学研究室では1984年の長野市大室古墳群の調査開始以来、25cmコンターで墳丘を測量しており、前述の茨城県南部の一連の古墳測量調査も例外ではない。比較のためには基準を統一する必要があり、今回も、これまでと同じ等高線間隔25cmで測量した。



写真1 42号墳測量調査参加者



写真2 17号墳測量調査参加者

#### 4. 調査の成果

下山42号墳を含む下山古墳群B支群の7基の円墳は北から延びる痩せ尾根に立地し、42号墳はその尾根の先端に近い場所に立地する。7基のうち39、40号墳は農道建設に伴い発掘調査され、失われた(崎山1993)。B支群の立地するその尾根の先端、43号墳よりやや低い場所を占めるのは横穴式石室が完存する43号墳で、こちらの方が42号墳より二回りほど小さい。42号墳もほかの下山古墳群内の古墳と同様、横穴式石室の石材が抜かれており、馬蹄形に墳丘が残るのみである。また墳丘の東側に一部削られた部分が看取できる。それでも、全体として墳丘の残りは非常によい。特に、墳丘の直径に対してその高さが高いため、墳丘斜面も急であることが特徴である(写真3)。42号墳は古墳文化の中心地である近畿地方に所在するためであろう、高さの高い、畿内型横穴式石室を内蔵していたことを容易に推測できる。

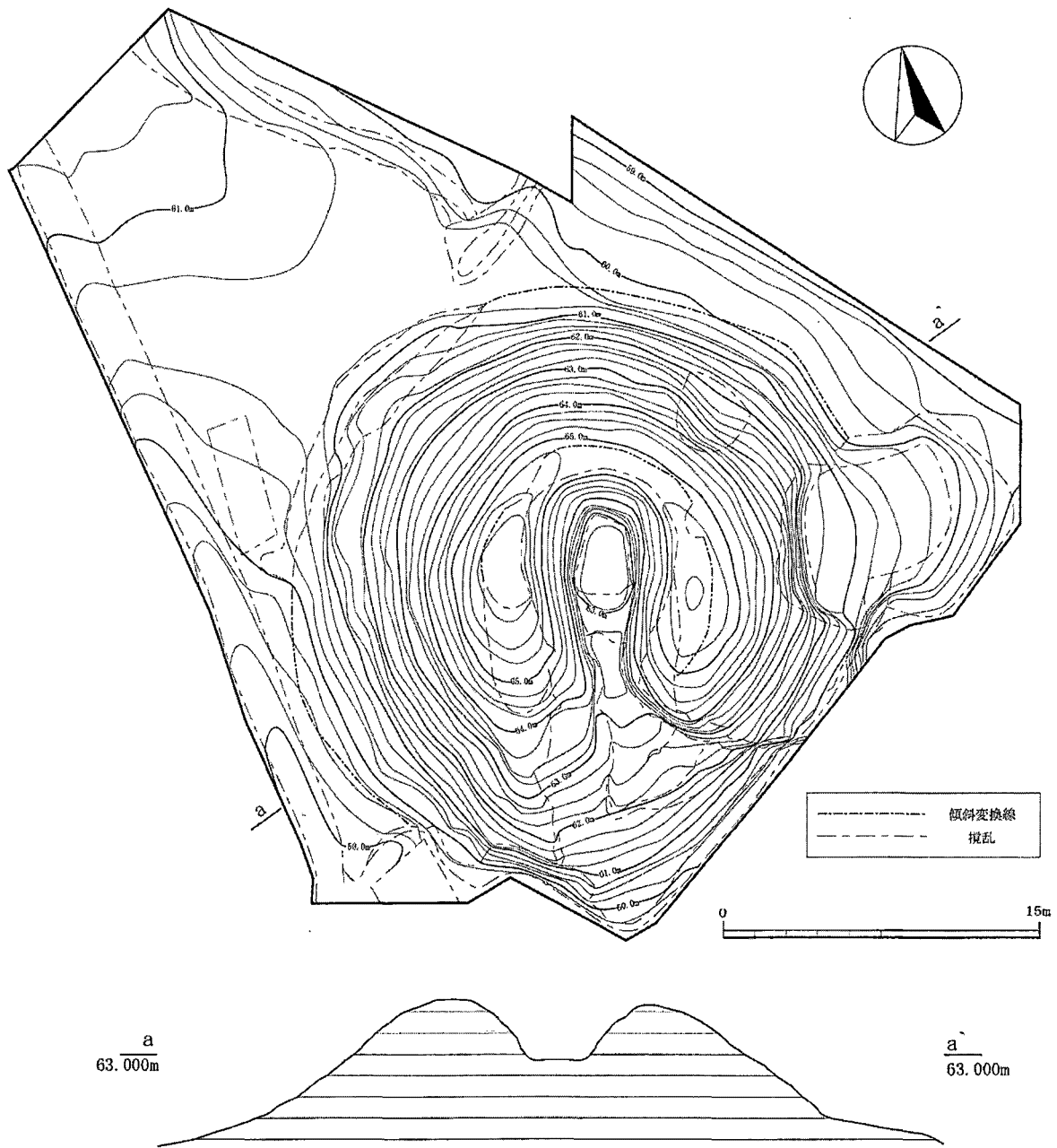


写真3 42号墳墳丘の現状



写真4 17号墳墳丘の現状

測量の結果、墳丘直径は、残りの良いa-a'で26.2m、横穴式石室主軸方向に約25m、残存高5.2mである(図5)。主軸はほぼ南北であるが、約10°東に振れる(もちろん、今後の発掘調査で石室主軸は確定させねばならないが)。明確なテラスは確認できなかった。また測量調査中、羨道入口西側付近にて須恵器の蓋坏



第5図 下山古墳群 第42号墳 墳丘測量図・エレベーション図 (S=1/300)

の坏身と高坏と思しき破片を採集した(図6)。坏身は外面に回転ヘラケズリが施され、復元できる直径は9cmである。埴輪などは採集できなかった。

坏身の時期はTK43と考えられる。崎山(1994, p. 46)が古墳の築造状況に基づき予測したように、42号墳がⅡ期(TK209)に先立つ古墳であることが確実となった。表採であるため、この須恵器が築造当時のものか、追葬時のものなのかはわからない。したがって、42号墳の築造はさらにさかのぼる可能性も否定できない。

下山17号墳は、46基の円墳から構成されるA支群で最大の円墳である。その南隣には裾を接するような近くに18号墳が存在する。A支群のうち72, 71, 70, 26, 25, 27, 22, 23, 74, 75, 76号墳の11基は農道建設に伴い発掘調査され、失われた(崎山1993)。発掘調査の結果、70, 25, 27, 22, 75号墳は、墳丘を持たない従属埋葬施設を伴うことが明らかになった。





番号	器種	厚さ	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1	蓋坏	7.5mm	外面・・・灰10YR6/1 浅黄2.5Y7/4 内面・・・灰10YR6/1 浅黄2.5Y7/4	砂粒(～0.3mm) 黒色粒(～0.1mm) 白色粒(～0.1mm)	やや 良好	20%	底部回転ヘラケズリ 第42号墳南西側排土より表採
2	高坏?	5.5mm	外面・・・黒7.5YR2/1 にぶい黄2.5Y6/4 内面・・・灰白2.5Y6/1 にぶい黄2.5Y6/4	黒色粒(～0.1mm) 白色粒(～0.1mm)	やや 良好	口縁部10%	第42号墳排土より表採

第6図 下山古墳群 表面採集須恵器 実測図



第7図 下山古墳群 第17号墳 墳丘測量図・エレベーション図 (S=1/300)

下山 17 号墳は、下山古墳群の他の古墳と同様、横穴式石室が抜き取られており、馬蹄形に墳丘が残る。

横穴式石室の主軸は、ほかの古墳と同様、ほぼ南北である。石室石材抜き取りのあとは大量の土砂で埋め戻されたようである。墳頂平坦面が非常に広いので、墳丘の最上部を崩して、埋戻しに使った可能性がある(写真 4)。ただ、埋戻しに使われている土砂は新しいものなので、埋戻しに最初に使われた土砂、つまり下層の土が墳丘上部の盛土であった可能性を指摘しておきたい。さらに、羨道入口付近(墳丘の南面)は、石室石材抜き取りの際の廃土がおかれたようで、舌状に現在の墳丘裾が南に延びる。

測量の結果、墳丘直径は、斜面が急で残りの良い北西・南東方向で 22.0m、東西方向に 23.0m、残存高 4.4m である(図 7)。主軸はほぼ南北であるが、石材抜き取り跡がほぼ埋戻され、正確な方位はわからない。明確なテラスも確認できなかった。また遺物は採集できなかった。したがって築造時期は不明であるが、Ⅱ期以降、平均的な墳丘規模が崎山(1993, p. )のいう「中規模 A」から「中規模 B」に小さくなる傾向があり、「大規模」墳である 42 号墳がⅠ期(TK209 以前)であることを考えると、17 号墳もⅠ期の可能性がある。

## 5. まとめと展望

今回の測量調査は、発掘を伴わないとはいえ、それなりの成果をあげることができた。まず第 1 に、下山古墳群形成開始の時期に関して手がかりを得られたことである。つまり、TK43 の時期には形成がすでに始まっていたことがわかったのである。これは、畿内型横穴式石室の出現時期を MT15 段階末としたとき、TK10、MT85 型式を挟むわけで、それなりに時期が下がる。形成当初は、追葬を前提としたような大規模な横穴式石室が構築されたようで、Ⅰ期の大規模墳は墳丘の高さも高い。

今回の測量調査を皮切りに、今後は継続的に大型円墳の測量調査、小円墳の発掘調査を実施し、7 世紀末に向けて下山古墳群がどのように変容したか、古墳消滅のプロセスに迫りたい。

今回の調査終了後も下山古墳群の調査は継続する予定である。また、和久寺廃寺出土の瓦と土器の整理も並行して進め、下山古墳群の終焉と和久寺廃寺の建立の時間的差異などを明らかにし、古墳から寺院への変革過程の一側面に迫りたいと思っている。これまで前方後円墳を含む古墳群から古代寺院への変革過程は比較的良好に明らかになってきているが、下山古墳群のように前方後円墳を含まない古墳群のケースも無視できない。

## 謝辞

2 回の測量調査に際しては、福知山市教育委員会八瀬正雄氏より絶大なご協力を賜った。また 42 号墳地権者の大槻真吾様、17 号墳地権者の和久威一郎様には測量調査をご許可いただいた。図 5, 6, 7 は岩田薫君と林和也君の手を煩わせた。厚く御礼申し上げます。

## 引用文献

大槻真純編 1983『和久寺跡第 1 次発掘調査概報』(福知山市文化財調査報告書第 5 集) 福知山市教育委員会

〃 1984『和久寺跡第 2 次発掘調査概報』(福知山市文化財調査報告書第 6 集) 福知山市教育委員会

〃 1985『和久寺跡』(福知山市文化財調査報告書第 8 集) 福知山市教育委員会

駒井正明 1995「前方後円墳と古代寺院に関する覚書」『大阪府文化財協会研究紀要』3(設立 10 周年記念論集) pp. 185-194.

崎山正人 1989『下山古墳群発掘調査概報』(福知山市文化財調査報告書第 14 集) 福知山市教育委員会

〃 1993『下山古墳群Ⅱ』(福知山市文化財調査報告書第 22 集) 福知山市教育委員会

〃 1994『下山古墳群Ⅲ』(福知山市文化財調査報告書第 25 集) 福知山市教育委員会  
佐々木憲一 1982『和久寺』私家版

佐々木憲一・鶴見諒平・九重明大・木村翔・千葉隆司 2012「茨城県かすみがうら市所在古墳時代終末期の前方後円墳測量調査」『古代学研究所紀要』第 17 号 pp. 131-151.

佐々木憲一・阿部芳郎・岩田薫 2014「茨城県小美玉市塚山古墳発掘調査概報」『古代学研究所紀要』第 20 号 掲載予定

福知山市史編さん委員会(編) 1976『福知山市史』第 1 巻 福知山市役所

#### 挿図リスト

図 1 京都府福知山市と下山古墳群の位置(崎山 1993、第 1 図)

図 2 下山古墳群(1)、和久寺廃寺(31)とその周辺の遺跡(例えば、横穴式石室がよく残存する額塚古墳群は 9)(崎山 1994、第 2 図)

図 3 下山古墳群出土須恵器編年案(崎山 1994、第 35 図)

図 4 下山古墳群の群構成(崎山 1993、第 67 図)

図 5 下山古墳群第 42 号墳墳丘測量図・エレベーション図(S=1/300)

図 6 下山古墳群 表面採集須恵器 実測図

図 7 下山古墳群第 17 号墳墳丘測量図・エレベーション図(S=1/300)

写真 1 42 号墳測量調査参加者

写真 2 17 号墳測量調査参加者

写真 3 42 号墳墳丘の現状

写真 4 17 号墳墳丘の現状